

強度行動障害への対応についての考察

本年1月20日に日本が国連の障害者権利条約を批准したことはご承知の通りですが、これと同時に強度行動障害を有する方への支援にあたり、特性に応じた専門的支援を合理的配慮に基づいて行っていることを本人やご家族、地域社会にも説明する義務が私たちに課せられました。そこで、社会福祉法人萌葱の郷では、20数年間、行動障害を有する方が地域の中で安心して暮らすことを目指して数々の困難事例に取り組んできた実践報告を厚生労働省発達障害者支援者実地研修事業の成果として冊子にまとめることにしました。

本報告書は、行動障害への対応を全て網羅しているわけではなく、私たち支援者がその要因を類型化し、対応方法を深めていくための手掛りにできれば幸いです。

はじめに

まず始めに、強度行動障害への対応について考察をすすめていく上で、人の「行動」と「行為」との違いについて整理しておきたいと思います。なぜなら、行動障害に対して、自閉症を始めとする発達障害の特性についてご理解いただくことはもちろんのこと、人の「行為」と「行動」の違いを整理して捉えることによって、本人の意思が伴う行為的な行動障害に対しては心理的・教育的なアプローチを重視し、本人に自覚や原因がわからないまま反応している行動には器質的・医学的な配慮を重視するというように、支援に見通しを持ちやすくなるからです。

もちろん、この2つの視点はどちらかに偏るわけではありません。相互に影響し合っていることを踏まえつつ、様々なアイデアや方法論を取り入れながら彼らの個性や特性に応じて幅広い対応が求められるわけですが、この複合的な支援観が自閉症を始めとする発達障がい者支援の軸になることを確認しておきたいと思います。なぜなら、こうした考えをもとにすることで、行動障害は治療的側面だけでなく、周囲の理解に基づく支援や環境構成によって改善や予防もできるといった「社会モデル」の見地から支援することの重要性を理解することができるとともに、ライフステージを通じた連携支援を行うにあたって関係諸機関との共通理解や情報交換などを行う必要性にも気付くことができるからです。

こうした見地から、本実地研修では社会福祉法人萌葱の郷を事務局として、医療・教育・福祉・行政・当事者のコラボレートによる研修形態をとることにしました。

本研修は自閉症を始めとする発達障がいに日々向き合い、行き詰まりを感じている支援者が技術を深められる機会となっていますが、事務局として携わる私たちにも多くの気付きや支援の向上が得られる機会にもなりました。ご支援、ご協力いただきました関係諸機関の皆様、あらためて感謝申し上げます。

行為的な行動障害：本人の意思を伴う行動障害であり、自閉症の特性如何に関わらず表出されることから、その方法については一般的にも共感的理解が得られやすい。

器質的な行動障害：自閉症の特性から生じる器質的な認知や感覚の異常から生じる行動障害であり、その特性に対する理解や支援経験を有した、より専門的な見地からの支援が必要とされる。

行動障害の原因と対応について

混乱から生じる行動障害（受動的）

認知特性などから状況の変化や周りの人の行動を読み取ることが困難となり、見通しが持てずに不安になって大声で叫んだり、混乱から頭を壁に打ち付けたりするような自傷行為をあらわし、この行為をパニックと称することもあります。

こうした行動障害を予防していくためには、認知特性に合わせて刺激の整理と見通しを提示することが有効であり、本人の希望を取り入れた支援目標を軸におきながら視覚支援や構造化を取り入れていくことと、周囲の状況や変化に対する解説を加えながら本人に自覚や了解を得る支援が求められます。

逃避的行為として生じる行動障害（孤立的）

「現実の苦しみから逃げたい」とか「避けたい」という欲求から生じる行為であり、自分の許容量を超える刺激や場面、人からの働きかけに対して、本人が意識する・しないに関わらず、自己防衛的な感覚を働かせて外界の刺激をシャットアウトしたり、同一性を保持することで現実から回避しようとする場合があります。また、こだわりを通して対象物や相手を自分の空想的世界に誘い込み、周囲を自分の行動ペースに変えることで場面を回避しようしたり、そのやりとり自体を機械的に捉えてシステム化させようとする時もあります。この他にも、フラストレーションや怒りを感じていても、それを人に伝える方法が分からなかったり、逆に、それを人に伝えたところで何の解決にもつながらない経験を重ねてきたことによって人からの支援を期待しない心情を抱えている場合もあり、こうした行動障害に対しては、生活環境の見直しを行うことはもちろんですが、本人が自分の困りを周りに伝達できるようになることを目指したコミュニケーション手段の獲得を特性に応じながら支援していくとともに、支援者との信頼関係をもとにして良好な対人意識を育てる支援が求められます。

自己表出手段として生じる行動障害（積極的）

場面や状況の変化、他者の行動を読み取ることが困難な時に混乱や不安、緊張、不満などを人に訴えたり、投げかけたりするといった自己表出手段（サイン）として自傷行為や他傷・破壊行為等をあらわすことがあります。この行為は、自閉症の特性に応じた理解や支援といった合理的配慮が整わない場面でおきやすくなるとともに、本人が表出手段を誤認識していることもあるため、本人が見通しを持ちやすくなるように構造化のアイデアを利用した予防的支援を行うとともに、インリアル法や視覚支援などを通して一般的な自己表出手段の獲得を導く支援が求められます。

否定的行為として生じる行動障害（否定的）

周囲の無理解から外傷体験を積み重ねてきたことによって対人関係への不滿意識が根付き、周りの人に対してどころか、自分に対しても不快感、或いは、人からの理解や支援を

あきらめているなど、ネガティブな感情を積もらせている時に、自傷以外に粗暴や他害、不潔行為などといった人の嫌がる行動をとることで周囲からの働きかけを防衛・回避させようとする行為がみられます。こうした行動障害に対しては、彼らの表面的な行為にとらわれず、その行為を生み出している要因を分析しながら受容的な関わりや環境の見直しを行うことで信頼関係を築き、本人の中にある自分や周囲の人に対するイメージを肯定的なものに変えていく支援が求められます。

上述した内容から、行動障害を未然に防ぐためには、TEACCHプログラムに代表されるように環境の構造化や状況の変化に対する説明を特性に合わせてあらかじめ伝えるといった予防的な支援が基本に必要とされていることが分かります。また、本人が意識的に行っている行動障害に対しても、予防的な支援をベースに関わることで見通しを立てやすくなり、彼らの対人意識にも変化が生じることで社会的な行為を導きやすくなります。

しかし、環境の変化を全て予測して防ぐことは不可能であり、強度な行動障害を有する方を支援していると、上述の支援だけでは理解や改善に導くことができないといった葛藤を抱えることも少なくありません。特に、人間は彼らにとっても最大の環境となります。そのため、変化に対する彼らの困惑を共感的に受け止め、その変化の意図を探りながら改善する意味や方法についても本人に分かりやすく工夫して伝える、あるいは本人が場面を回避できることをめざした上で、その不安となっている対象を取り除いたり、本人が社会的に回避できる手段を教育するといった、より高度な専門性が支援者に望まれます。

そこで、ここからは自閉症特有の感覚や認知機能といった器質への配慮に合わせて、事例を交えながら考察を深めてみることにします。

自閉症の認知特性を原因とする行動障害

器質的な認知（感覚の障害）から生じる行動障害

自閉症の方は、不安定な感覚入力による不快感を原因に行動障害を生じてしまうことが少なくありません。この対応には、共感や受容的な態度による働きかけを中心に解決しようとするだけでなく、生理的な欲求や身体的な不快感に対して生活環境を見直したり、感覚を和らげるアイデアの活用や医学的な治療、生活に見通しが持ちやすくなるように構造化を図るなど、複合的な配慮や支援が求められます。具体的には、服薬による治療はもちろんのこと、五感に対する刺激の遮断や集中を喚起させるためにパーテーションを導入したり、ヘッドホンを活用する例などがあげられ、言語理解や空間認知が遅れている場合には、絵カードや時系列に整理したスケジュールを表示することが有効です。また、作業療法士による感覚統合を目指したトレーニングや、見通しをもって自分の行動を選択できるように時計やカレンダーから情報を読み取る力を育てることも重要な支援の1つです。しかし、私たちはこのように環境調整を整えていく中でも、自然に自分の都合に合わせて環境が整っているのではなく、そこには自分に対する人からの想いが伴っていることを彼らが意識できるように支援者が配慮することが最も大切であると考えています。なぜなら、

彼らから自分に向けられた感情や想いなどを知ることによって、自分と他者との違いに対する認識を深め、自分の感情を意識したり、人からの求めを考えたり、気持ちに寄り添う感情に意識を向けていくことができているからです。

器質的な認知（心の理論の障害）から生じる行動障害

自閉症の特性として、人の行動を場の状況や自分の置かれている立場と照らし合わせて推理する力「心の理論」が発達しにくいことが認められており、これが原因となって周囲の人間の行動理解が困難となって不安や誤解が生じたり、自制心が働きにくくなってしまふことがあります。事例をあげると、入所施設の週末帰宅時に家庭で10kgも体重が増えるほどに水を摂りすぎて水中毒をおこし、このまま血液中のナトリウムイオン濃度が低下すると死に至るという危険から医師に帰宅を禁止された方がいました。彼は、家庭では水道以外にも自動販売機や冷蔵庫など、本人が目に入る水は全て気になって混乱を深めてしまうため、入所施設のような制限のある中で継続的に暮らすことを勧められたわけです。しかし、入所施設も集団生活の場であるため、彼のために飲み水を全てコントロールすることは不可能でもあり、施設内でも本人が落ちつくまで職員が交代で水道場に行く事を制止する支援を続けていました。

入所施設は構造化された環境下であるため、日中の作業時間等は気が紛れて良いのですが、その合間に水道場に行こうとしたり、就寝後には突然に起き上がって行こうとするなど、24時間ずっと目が離せない状態でもありました。しかし、職員の心配をよそに、彼は制止をかいくぐろうと行動をエスカレートさせていくため、私は彼に「これ以上、水を飲み続けるとあなたの命が危ない」「私はあなたに死んで欲しくないから止めている」とはっきりと言葉で伝え直してみたところ、彼は初めて「わかった」と言って静かに頷き、それ以降、自ら水道場に行こうとする様子はみられなくなりました。

その結果、その禁断症状の如く水を飲もうとする行動は治まり、体重が戻って生活も安定していったのですが、振り返ると、もしも私が自分の行動の意図を彼に伝えていなければ、彼は私の行為を支援として受け止めることはできず、こちらの制止に応じないまま行動障害をエスカレートさせていたことが考えられます。この支援以後、私は自分が支援している意図や内容について、できるだけ本人にわかりやすく伝えることを心がけています。

また、彼らの中には、自分の行動を周囲に理解してもらえない、あるいは、周囲の行動を自分が理解することが困難であるといった辛さから、暴力的、あるいは反社会的な行動を選択してしまい、さらに周囲からの理解が得にくくなるといった悪循環のもとで孤立を深めてしまう方がいます。特に日本は、歴史的に多様な価値観を受け容れる基盤が成熟しづらく、「空気を読む」ことが求められるように、特異な言動を受け入れにくい土壌の中で彼らの行動に対する周囲からの理解が得られないことも少なくありません。そのため、彼らの表面的な行動を一般的な見方で理解したり、解決に導こうとするのではなく「双方の認識の違いから生じる誤解をつなぎ合わせていく」といった専門的な支援が求められてくるわけですが、実際に、周囲の人と関わる中で「どうも歯車が合わない」といった本人

の訴えに耳を傾け、双方の心理的な描写や視点の違いを指摘した上で、相手の想いや立場からくる都合を解説しながら折り合いを求める支援が、社会のいろいろな場面で必要とされていることを高機能自閉症やアスペルガー症候群の方への支援を通して感じているところです。

具体的には、余暇の時間などに共通の話題や遊びに気持ちを向けながら、今、本人が会社や社会生活の中で感じている不安や不満などを会話から拾っていくとともに、聞き取りの中から周囲が本人へ期待している想いを分析しながら代弁・伝達するようなコンサルテーションを定期的に行うことで、彼らのストレスや不満の解消、あるいは周囲への誤解から生じてしまう行為障害を防げている例も少なくありません。

このように、彼らが日常生活の中で抱える困りを支えられるキーパーソンをつくり、本人との信頼関係をもとに定期的に認知の調整と心理的なケアを行うような支援ニーズが増えていることから、人の行動を場の状況や置かれている立場と照らし合わせながら分析し、それを彼らに噛み砕いて説明する力を向上させることが自閉症支援の専門性として問われていることを大分県発達障がい者支援センターに寄せられる様々な支援事例を通して関係諸機関にも紹介しているところです。

器質的な認知（関係性の認識が困難）から生じる行動障害

人の求める感覚世界や対象は人によってそれぞれですが、私たちはその欲求に対して、常に自分の中で周囲とのバランスを考えながらコントロールして暮らしています。その例として、私たちは宗教や法律、或いは家族や好意を持つ人物等を意識することで欲求に規制をかけたり、行動を選択していること等があげられます。しかし、もし、そこで自分と周囲の人とを結んでいる糸が切れてしまったら、つまり、自分の中で周囲の人を意識しなくなった時に、私たちは一体どんな行動を取ってしまうのでしょうか？ ある意味では気が楽になり、自由好き勝手なことが出来て良いように思うかもしれません。しかし、それで私たちは本当に楽になれたと言えるのでしょうか？ 他者を廃し、人を抛り所としない孤独な人生に耐えて生きることが出来るとは思えません。また、感覚的な欲求は、求めれば求めるほどに強いものにエスカレートしていきますし、ここで、自分に何らかの行動規制をかける、また外部にその機能を求めていくことがなければ、自己破綻に向かうことは言うまでもありません。私たちが、自分の欲求や行動にブレーキをかけたり、反省して行動をあらためることができているのも、やはり心に他者が宿っているからであり、「煩わしいな」と思いながらも、「相手が自分をどう思っているのか」、「自分は相手にどう思われたいのか」ということを考えながら行動していることが、実は自分を守ることにもつながっているわけです。

前触れが長くなりましたが、こうしてみると、なるほど「自己確立とは人との関係性によって支えられているのだ」ということが分かります。そして、これは、私たちと周囲に対する認識や感覚の違いがあっても、自閉症の人たちにも同じ事が言えるように思われます。むしろ、彼らこそ、周囲の言動から感情や真意を読み取れる人からの支援を受けて暮

らすことが必要とされているのではないのでしょうか。なぜなら、狩をして生活するような原始時代ならまだしも、現代のような分業が進んだ社会の中で、他者と頼りあえる関係を廃し、自分だけを頼りに自立して生活することは困難であるに違いないからです。そして、この依存し合う関係とは、人間の心情によっても大きく左右されてくるものです。私たちはこの「依存関係」に注目しながら強度行動障害のある方々を支援していくことで、人間が社会で生きていくためには、人の言動を表面だけで判断するのではなく、心情面から捉えることが最も大切であることを認識しております。

例えば、自分の目の前に出された食事を場面や状況を表面的・機械的に取入れやすい自閉症者は「自然に目の前に食事が並べられている」といった意識に止まりやすく、「母親が自分に対する愛情をもとにつくってくれている」というように、相手の立場や行動から心情を推測することが非常に苦手です。まして、「その食費を稼ぐために、父親は家族への愛情を背負って働いている」というように、連鎖的に人の行動を裏付けている様々な願いや心情にまで想いを馳せることは、より困難な作業にもなります。

また、現代のように社会的な分業化が進み、スピードや評価が重んじられるとともに、少子高齢化や核家族化によって地域社会が縮小していく中では、周囲の人の言動に対する心情について考えたり、解説を受けたりする機会が減っていることを感じることも少なくありません。そのため、自閉症者に限らず、私たちは他者と依存し合える関係を構築しづらくなっており、その影響から、以前に比べて違和感や生きにくさを抱える人が増えているようにも考えられます。

このように捉えてみると、もともと他者の心情が宿り難い特性を持ち合わせている彼らは、それが社会背景からも阻害されることによって、欲に身を任せてお代わりを要求するような我が侘に見える行為や、区切りがつかない程に行動をエスカレートさせやすくなってしまふことが心配され、私たち支援者が自分の心情を彼等に気づいてもらえるように提示の仕方を工夫する配慮が必要であることをあらためて気付かされるわけです。このことについて、事例を交えながらもう少し考察を深めてみます。

人にお代わりを要求する際、1度お皿を空にかざしてから片手で逆さにしながら手渡すというパターンをつくっている方がいました。何気ない行為でもあるので、そのまま見逃してしまうのですが、敢えて「私はそれでは応じない」と彼の一方的な行為には応じずに、こちらに向かって「お願いします」と皿を手渡すことを求め直していきました。すると彼はハッとしてから、思うように動かない私に対して、自分の要求を押し通そうとして無理やりお代わりを運ぶように追いたててきたのです。そこで私は「あなたは自分で思うように食事ができていると思っているかもしれないけど、その食事を準備しているのは私です。私の提示するルールにも応じてくれなければ、私はおかわりを持ってきたいと思いません」と伝え、彼に「自動的に食べ物が並べられているのではない」、「意志を伴う人間からの支援のもとに自分は食事ができているのだ」ということを意識してもらえるように、私の主張も交えながら関わることを試みました（こうした関わりは、半年間、受容的な関わりを通しながら、人に対する信頼関係が彼の中で回復してきた時点で行ったために成功でき

たのですが、人に対する信頼関係が構築されておらず、ネガティブな意識が強くある時には、まず、環境的な配慮や受容的態度を持って信頼関係を構築することを目指した対応が求められます。また、既に他者を意識した自立的行動がとれる方には、ここまで細かい対応をする必要はありませんが、観察を続け、時には意識化できるように支援を見直す必要があるかもしれません)。こうしたやりとりの確認を日常生活の中で増やしていくとともに、こちらの提示に応じていただけた時には、少しオーバーなくらいに拍手をして褒めたり、「ありがとう」と感謝の気持ちを言葉などで表していった結果、彼が自分の判断に任せて行動することが減り、行動障害に至る場面も激減していきました。

支援者の存在を意識する

このように、私たち人間は機械的に行動しているのではなく、それぞれが自ら意志を有しており、その意志を持った人間が支え合うことで暮らしが成り立っていること、すなわち、「人は物や道具とは違い、各々の考え方や気持ちに対する配慮をもとに依存し合って暮らしている」ということを生活の中で自閉症者が実感できるように工夫することが、彼らが自分の欲求や感覚を優先させてエスカレートしていくブレーキにもつながっていくわけです。そして、私たち支援者も、彼らに自分の存在に気づき、受け入れてもらいたいと思うことは当たり前のことであり、それが認められなければ、対人援助の仕事にやり甲斐は持てません。一方的な要求ばかりを受け続け、相手に感謝されるどころか、その人の手足や道具のように扱われ、自分の都合や存在は認めてもらえないことに良い気分がするはずもなく、そこには人間らしい関係も期待することもできません。支援に行き詰まりを感じて虐待に至るケースなどは、支援者が利用者や他職員との間で助け合い、認め合えるような環境が整わないままに一方的な価値観の押し付けや、孤立感に耐えられずに生み出されているのではないのでしょうか。そのため、私たち支援者にとっても、特性の理解や技法の取得はもちろんのこと、周囲に自分の困りや考えを分かりやすく伝えたり、理解や支援を求めるスキル、スーパーバイズの体制や適切な評価が受けられる機会を用意することが大切であるわけです。

以上のような環境下で自閉症者が支援者の存在を心に育むことによって、対人意識が安定し、こだわりや行動障害も緩和していくとともに、「社会の中で自分を役立ててほしい」という純粋な感情が表出されていきます。この「依存関係」への欲求は、人間が持つ本来の姿であり、その欲求が満たされないと行動も歪められてしまいますが、理解され、満たされることによって建設的な行為へと発展していくものでもあります。2次的な障害を生み出さないためにも、行動に裏付けられた心情を確認し合い、その折り合いをつける調整役が任されていることを私たち支援者は自覚しなければなりません。

また、私たちが人として支援に携わる時に、相手の中に自分がどのような形で宿るのかということを意識することも大切です。そのため、特に施設の中では、生活を構造化するだけではなく、そのスケジュールをプロデュースしている支援者の存在や心情を好意的な形に受け止めてもらえるよう、私たち自身の言動にも気を配る必要があります。

地域生活に向けて

次に、生活の質を向上させていくためには、衝動を抑制・コントロールする機能（自分の欲求と社会的な行為との折り合い）を人との関係の中で具体化させて身につけていく教育的な支援が求められます。なぜなら、未然に防ぐための計画は不可欠ではありますが、地域支援を進めていく中で、予めすべての計画を立てることも不可能であり、衝動的な行動に対して刺激物を取り除く以外にも、止めたり、やり過ぎすといった本人の行動を抑制せざる得ない場面がどうしても生じてくるからです。しかし、その際には、行動を制止するだけでなく、その機能を絵カードや言葉などに具体化させながら生活の中で般化していくことが重要となります。

具体的には、行動を止めながらも代弁的・肯定的な声をかけや、状況や他者との折り合いをつける仲介を行い、行動のコントロール機能をより標準的である言語へと置き換える支援を計画的にすすめることが理想です。そして、その際には、いくら視覚優位だからと、自閉症の人には言葉が通じないものだと言えないことが大切でもあります。なぜなら、言語は表出言語だけでなく、理解言語としても発達していくからです。また、こうした自己コントロール力を導くためには、互いの中で「衝動を抑える・気持ちを切り離してやり過ぎす」という成功体験を積み重ね、自分の行動に対して肯定感を育てていくことも重要であって、関わる際には賞罰を与える側と与えられる側という対立した関係をとるのではなく、「共にハードルを乗り越えていこう」という、支援者の共感的な姿勢が彼らに伝わるように配慮することが大切です。なぜなら、彼の行動を一方向的に委ねていくのではなく、彼の中にコントロール機能を導き、共に支え、育てていくという共感をもとにした自我援助（本人の努力しよう、乗り切ろうとしている気持ちを肯定しながら代弁を行い、その意識を強化する支援）を行うことが、支援者との信頼関係のみならず自立心や自己肯定観を育てていくことにつながっていくからです。

また、こうした支援をすすめる中で、彼等が此方を伺いながら応答を求めてくる場合があります。これには、此方の反応を伺い試していることも考えられるのですが、むしろ逆に「踏みとどまれる自分」或いは「その人と一緒に踏みとどまれる関係性」を確認するために行っていると受け止められることも少なくありません。なぜなら、わざと此方を困らせようとしているのであれば、止めに入っても踏みとどまるはずがないからです。

上述した置き換え行為の実践例が、自閉症の A 君が見せた「しょうがない」という相槌をする行為でした。彼は、刺激に対して衝動的に行動してしまいやすいため、器物破損や他害行為を重ねてしまい、後悔をしながらも、その衝動性やこだわりを自他ともにコントロールすることができずにエスカレートさせてしまった結果、地域生活が困難になり、入所施設で支援を受けることになりました。彼は体も大きく、力も強いことから、破壊行為や他害行為が大きな事故に結びつく危険もあるため、入所当初から、彼の気になる刺激に対して、できる限り予防的・計画的に支援が行えるように、刺激の少ない構造化された居住棟をベースに生活をおくることで行動の安定を期待していくことにしましたが、地域から離れた環境下においても、こだわりは衣・食といった身近なものに移り、衝動性やこだ

わり行為は解消していきませんでした。そこで、このままでは地域に復帰するどころか、本人が好む外出などの活動自体もままならなくなることが心配されたため、衝動性やこだわりに対して支援者との関係性をもとに自制できる力を育てることをあらためて目指していくことにしました。

具体的には、構造化された環境下で、先述のように支援者を意識する配慮を行うと同時に、トラブルが起きた時には、彼を責めるのではなく、共に衝動を抑えようと、時には体を張って止めたり、その場から引き離して気持ちを切り替えるような関わりを粘り強く続けていったわけです。生活の中では、他の利用者の存在やエアコンのファン、自動販売機の電気など、本人が気になる物を取り除いたり、必要を説明しきれないことなどもたくさんあるため、本人や周囲の身を守るために「しょうがない」と言ってやり過ごすことも少なくありませんでした。しかし、半年後の彼は「(気になるのだけれども)しょうがない」という相槌を此方に求めることで、衝動に駆られた自分を抑えながら気になる物を避けて行動することが出来るようになっていったのです。この「しょうがない」という概念とともに、今まで彼の中で浮き沈みしていた他者というものが心の中に根を張り、自分の行動基準に影響を及ぼしていることが窺えるわけですが、個人差はあっても、実は私たちがかなりの部分でこの「しょうがない」を他者との情緒的な関係のもとで受け入れて生活しており、それが社会生活の安定にもつながっていることに気付かされました。

意図的に人に向けられた否定的な行為は、理解のある人からの対処により、自分が人から脅かされないという安心感を培うことで静まっていきますが、このような対物・対人に向けた衝動的な行為に対しては、自閉的な境地からではなく、人と社会的な価値観を共有しながら「あきらめる」「あきらめられた」「とりあわずにすんだ」「スルーできた」という成功体験を積み重ねていくこと、すなわち、信頼のおける支援者のもとでその人と心情を共有しながら行動する体験ができるとともに、そのやりとりを積み重ねていくことで「依存関係」が生まれ、人の働きかけに添おうとしたり、自分の行動をセーブしようとする意識が育っていくわけです。これが、関係理論をもとにした支援形態であり、受容(理解)のもとで行われる交流(関わり)理論です。これは、言語的に表現すると、「持ちつ持たれつ」とか、「互助」「助け合い」など、ごく身近な、当たり前に行われている人間の営みでもあり、人間同士が社会の中で円滑に交流していくために必要とされる見方でもあります。この「依存関係」を情緒的な関係まで深めて捉えると、他人の死と肉親の死では、私たちは感情の受け止め方が異なることはもちろんのこと、「両親を悲しませたくない」という心情から言動をセーブしたり、改めたりしている例などをあげることができます。

おわりに

現在、私たちは彼らが施設のような構造化された環境下で育んだ「人間関係」を地域社会への参加に向けて展開させていくために、スーパーバイズの体制や諸機関による共通認識、関係性の向上を目指した連携をすすめることが重要であると捉え、法人内のみならず、関係諸機関にも理解を広げる専門家養成を行うとともに、ネットワークの拡大を推し進め

ています。

こうした普及啓発活動のもとで障害者への体罰や人権に対する見識や制度が深まりつつある反面、安易に、刺激の制限だけをすすめる支援方法は、人間の健康的な世界観を奪うといった人権問題につながることを踏まえて、より慎重に議論していかなければならないとも私たちは考えています。なぜなら、施設や病院などにおいて刺激の制限のみを進めた結果、何も置かれていない部屋で、専門的な支援計画が用意されずに何十年も部屋から出られないまま生活している自閉症者も実際にいるからです。行動抑止を過度に意識しすぎた環境下では生活を委縮させてしまうばかりで、QOLを目指した支援を図ることはできなくなるという、アンビバレンツな葛藤が生じてしまいます。こうした問題からも、私たちは関係性を育てる理念をベースにしなが、地域生活に向けて環境調整や発達支援をすすめていくとともに、地域を始め周囲の方々に専門的な見地から支援の内容を説明していく力量を高めることが問われていると感じています。

以上、行動障害の類型と支援方法について幾つかの見解を論じてきましたが、私たちは彼らの社会参加を支援していく中で、自立生活に向けた支援の計画を彼らに説明して理解を得ることや支援者間で支援内容の議論を十分に行っていくことが大切であることを多くの方々にご理解いただき、支援の内容を発展させていきたいと考えています。しかし、私たち人間は己の価値観や感情を優先させ過ぎてしまい、自分の行動を客観的にみることが苦手であります。彼らに対して一方的に変化を求めるのではなく、自分の考えや見方を変えていくために、自分が心理的な負担や緊張感などを誘発させるような存在になっていないかどうかを省みるとともに、自分が成長することを肝に命じておかなければなりません。自閉症者もユーモアのある、気の置けない関係を人に求めています。行動障害の激しい人と一緒に居ると、張り詰めた空間にお互いに息がつまり、行動障害を助長させてしまうことにもなりかねません。そのため、本人のニーズに合わせた余暇やリラックスしたムードをつくりあげるセンスを磨くことも支援者には求められ、行動障害に対して冷静に分析的に関わる反面、リラックスしたムードで接するという、常にバランスのとれた強い精神力を磨いていかなければならないわけです。

自閉症者も支援を受けることばかりを望んでいるわけではなく、人への安心感をもとに建設的な対人意欲が育つと、社会の中で自分の存在価値についても意識し、周りに認められることを求めて社会的な活動を考えるようになります。その段階になると、本人が周囲から認められるような場面を仕事や生産活動などを通してコーディネートする力量も支援者側に求められてきます。私たちもまだまだ未熟ながらも、こうした視点に基づいて、開設当初より、生産活動や就労実習などの取り組みを重んじて就労や余暇支援を含めた地域貢献活動にも取り組んでまいりました。これからも本研修事業などを通してその成果を社会に広く紹介していくことが当法人の役割と使命とも受け止め、多くの方々のご協力をいただきながら、自閉症支援の発展と普及をすすめていきたいと考えています。